

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320140

研究課題名(和文) ユーラシア諸帝国における君主と軍事集団の展開 境界を越える「武人」とその紐帯

研究課題名(英文) Sovereign and Military elites in Eurasian Empires: warriors crossing geographical and ethnic boundaries and the formation of their social bonds

研究代表者

清水 和裕 (Shimizu, Kazuhiro)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：70274404

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、イスラーム帝国アッバース朝、ムガル帝国、サファヴィー帝国、大清帝国というユーラシア諸帝国における軍事集団の「越境」の実態に注目することで(1)「武の人」の君主との絆および軍事集団内部の相互の紐を支えた理念のおよび現実的背景(2)統治機構・支配イデオロギーとの関係の主要2点を、(1)武人の主人に対する隷属性、(2)越境する人々の「他者性」、そして(3)これらの集団のキャリア形成と国家体制の関連性、の面から具体的に明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In our program, we attempted to carry out a comparative historical study on the relationship between monarchs and their military subordinates who were from different ethnic groups and had different cultural backgrounds. The fields of our studies were on four Eurasian empires including: Islamic Empire of `Abbasid dynasty, Mughal Empire, Safavid Empire, and Manchu-Chinese Empire of Qing dynasty. We clearly showed the historical importance of (1) servility of military subordinates towards their masters, which represented itself as loyalty, and (2) the meanings or effects of "otherness" of these military subordinates who came across the border on their functions as military elites.

研究分野：西アジア史

キーワード：ユーラシア史 比較史

1. 研究開始当初の背景

本研究は越境と社会的紐帯の視点からユーラシア諸帝国の軍事集団の特徴を究明するものである。着想の主な背景として、ユーラシア帝国史における武人研究の絶対的な不足があげられる。これは刊行史料の多くが文人によって記されたことによる史料状況の偏り、国家史ついで国家から離れた構造論に傾斜してきた歴史研究の状況による。研究者の関心は支配者と軍隊の政軍関係と個別史記述に力点が置かれ、武人集団の内実については細かい検討がなされてこなかった。一方、近年は「下層」「周縁」民への関心を深めた社会史や構造分析が注目を集めてきたが、「生死」に深く関わる軍事集団との関連も想定されるにも関わらず、国家体制を武でもって支えた軍事集団について関連づけた研究は少ない。つまり、統治エリートとしては君主・王権の陰に隠れ、社会の構成員としては「上部階層」として無視されてきたのである。しかし、ユーラシアの広域支配を実現した四帝国の軍事集団を観察すると、しばしば自立した組織や内部規律を持っており、君主のみに忠誠を誓う集団では必ずしもない。また、支配を実現した中核地域の外部にルーツを持ち、いわば社会的他者の側面を有していた。そこで、本研究では特に軍事集団の内部紐帯と君主との関係および支配組織の型との関係に注目し、これが境界移動(越境)と帝国化の中でいかなる変容を遂げたのか、具体的に検討を行うこととした。

2. 研究の目的

上述の通り、本研究は越境と社会的紐帯の視点からユーラシア諸帝国の軍事集団の特徴を究明することを目的とした。具体的にはアッパース帝国、サファヴィー帝国、ムガル帝国、大清帝国の四帝国の武力を担った人々とその組織を対象に、文明圏の越境と帝国化によって生じた変容に注目して、支配者に対する忠誠概念や武人集団内部の紐帯の実態、集合意識を規定するイデオロギーや倫理観、並びにこれらを支えた言説空間・価値観の獲得について明らかにし、ユーラシア諸帝国において政治・軍事の担い手となった「武の人」の実像を明らかにすることで、イスラーム史や内陸アジア史、中国史といった研究の分断状況を克服し、ユーラシア史における新たな帝国論と軍人史研究を構築することを意図した。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、四帝国における軍事集団の「越境」の実態に注目することで「武の人」の君主との絆および軍事集団内部の相互の紐を支えた理念のおよび現実的背景、統治機構・支配イデオロギーとの関係の主要2点を具体的に明らかにすることとした。

(2) このために3年間にわたって、各年度に集中課題を設定した。1年目は軍事集団の「越境」現象について具体的な事例を集め、「境界」のあり方も含めて討議し、2年目は軍事集団の君主との結びつきおよび内部紐帯について明らかにする。3年目は軍事集団の越境と帝国の支配制度の型の関係について論じた。この課題に応えるために、海外での史料の収集活動を行い、また2年目には、研究交流の中心的な地域として設定したコーカサス地方への訪問調査を行うこととした。また、その成果を議論する場として、各年度に複数の研究会と海外の研究者を招いたワークショップを開催した。

(3) 具体的作業としては、初年度(平成24年度)においては、当初設定したアッパース帝国、サファヴィー帝国、ムガル帝国、大清帝国に研究の焦点を合わせた。そして上記の4帝国における「帝国」の国家構造と軍事集団の関係の差異、およびそれぞれの帝国が支配する社会において忠誠心や集団の紐帯の基本構造について、研究史を踏まえつつ問題点の整理とすりあわせを行い、比較史を進める上での基礎的な研究基盤を整えた。それとともに、各帝国における歴史的諸条件の違いと制度的な共通性を明らかにし、それぞれの帝国における武人とその紐帯について、個別に史料調査・分析を進め、インドなど海外における写本調査などを行った。また、年度末にグルジアおよびアルメニアより、グルジア写本センター文書学部門長ゴチャ・サイティゼ氏、アルメニア国立イェレヴァン大学教授ハイラペト・マルガリャン氏を招聘し、コーカサスにおける軍事制度およびそれと関連する写本資料に関する国際ワークショップを、首都大学東京と大阪大学で開催した。

(4) 第2年度(平成24年度)には、分担者の研究においては、特に「君主と武人の紐帯と忠誠」をトピックとして取り組むこと、分担者の研究地域を超えたユーラシア諸地域について、その事例を確認すること、を目標とした。このため、年間に4回の研究会を開催し、については研究分担者各自が、現時点での研究進展状況を報告し、特に「武人の紐帯」の側面から、アッパース帝国における革命時の軍事集団形成のあり方、大清帝国における八旗の忠誠構造とその政権における展開、ムガル帝国マンサブダール制における血縁的また擬制血縁的紐帯の意味などを明らかにした。については、鈴木宏節(大阪大学)、阿部俊大(九州大学)、伊藤一馬(大阪大学)、三田昌彦(名古屋大学)といった研究者を招待して報告を受けた。さらに、秋期の共同海外調査において、初年度国際ワークショップの成果を受けて、グルジア・アルメニアの研究者とのネットワークを形成するとともに、文書・写本調査を行った。

(5) 最終年度(平成26年度)には、帝国論・国家論的な観点からこれまでの研究を総括し、最終的な成果をもたらすことを目標とした。特に集中的に設定したテーマとして、それまでの2年間を通じて検討を重ねた「越境する軍事集団」と、イスラーム世界・インド世界・中国世界の国家組織の関係について検討を行った。このため早稲田大学の谷口眞子氏を招いて、日本の佐賀藩における殉死のあり方に関する報告を受け、日本武士の忠誠心のあり方と藩の政治構造の関係に対する分析を、ムガル帝国、サファヴィー朝、アッバース朝、大清帝国のそれぞれの国家構造と比較検討した。また12月14日には、九州史学会大会イスラーム文明学部会において、シンポジウム「ユーラシア諸帝国における君主と軍事集団の展開」を開催し、研究代表者・分担者各人が、本プロジェクトの研究成果を発表した。会場で参加者を交えて活発な討論が行われた。さらに1月末から2月にかけて、グルジアより国立イリア大学准教授テモ・ジョジュア氏、ウダブノ学術財団総裁ラド・ミリアナシュビリ氏を招聘し、東京大学、神戸大学で国際ワークショップを開催した。

4. 研究成果

(1) 上記の方法によって得られた成果として、全体的な枠組みに関わるものとしては以下のことが明らかとなった。まず、主たる対象としたユーラシアの諸帝国において

軍事集団のキャリア形成や集団形成の原理のあり方が国家の基本構造と密接に関わり、またときに官僚のキャリア形成とも関わること、

君主・武人関係と主人・奴隷関係の重層制と、家産国家的な支配集団のイエと社会における家族原理の重層制に注目することの重要性、

越境する支配者、越境する武人といった「他者性」が以上の2点にもたらす影響の範囲に着目する必要性などが明らかとなった。

(2) 個別研究としては、まずイスラーム帝国アッバース朝について、八・九世紀を中心とした初期アッバース朝の成立および維持に関わった軍事集団を、社会的紐帯の面では、アッバース朝革命軍(ホラーサーン軍)の内部構成、アプナーと呼ばれる初期王朝軍の構成、アミンとマームーンの内戦時にあらわれるマームーン軍の構成、そしてそれを継承して新たに創設されたムウタシム軍のあり方について、軍隊組織と内的な構成論理、および君主との契約的關係、半隷屬的關係、純然たる隷屬關係に着目しつつその推移を明らかにし、また越境性の面では、特にホラーサーン、中央アジア、アフガニスタン地域のもつ地域的性格とそこからイラクに至る地理的移動性・越境性の歴史的意味、および、アラブ帝国に存在した支配的アラブ上

層階層と被支配的非アラブ階層の間を移動する社会的越境性の意味を明らかにした。

(3) サファヴィー帝国に関しては、特にサファヴィー朝に仕えたコーカサス出身者のアイデンティティの問題について、武人としての活動など武との関わりに特に配慮しながら分析を行い、新出史料である『歴史の精華』第三巻から、畏と知りながら敵地に突撃して戦死する「奴隷」軍人の姿や現地民の習俗を真似るキジルバシュなど、軍事的属性の表出の様相を明らかにした。また、サファヴィー朝支配領域各地に広がったグラム・エリート層の支配のあり方についても検討した。加えて、近年のオスマン朝研究における、16・17世紀における帝国の統治体制再編と社会変革の連動の研究成果も取り込むことで、オスマン帝国とサファヴィー帝国との軍事制度の比較研究をも推進した。

(4) ムガル帝国に関しては、その人士の大半がマンサブダールとして、あくまで書類上ではあるが、軍事的義務を負っていたため、その点において彼らは「武人」であったこと、ムガル帝国を「軍事国家」と性格づけることさえ可能であることに着目した。一方でマンサブダールには、およそ軍事的な機能や履歴を有さない官僚や文人が多数含まれており、マンサブダールは、その生業や社会的機能によってではなく、一種の身分として「武人」であったにすぎない。こうした、さまざまな帰属、背景、生業、機能を有する人材を「武人」として吸収することになったマンサブ制度のあり方を明らかにし、「武人」としてのマンサブダールたちが取り結んだ人的紐帯の諸相を検討することによって、マンサブダールが備えていた多重的な人的関係が、マンサブ制度のもとでいかなる再編成を遂げたのかを明らかにした。

(5) 大清帝国については、その軍事組織にして、国初の国制そのものであったのが八旗制である。この八旗制の実態を解明することにより、八旗が階層組織体系、分封と世襲、各自の小宮廷と親衛隊・家政機構の保持、特権の与奪による賞罰体系、といった、中央ユーラシアに出自する諸国家と通有の体制を有していたことを明らかにし、大清帝国と八旗制は、中央ユーラシア国家とその軍制の系譜上に、明確に位置づけることができることを示した。また八旗型の主従ユニットとその統属方式は、征服の拡大とともにモデルとして適用され、モンゴルをはじめとする中央ユーラシア東方諸地域のさまざまな勢力も、ジャサク旗に編制されて、八旗に準じた制度体系下におかれ、軍役を提供した。このように、軍事組織と軍事集団の面から見たとき、大清帝国は、中央ユーラシア的な制度と人的資源によって支えられた帝国であったということができるのであり、以上のごとき帝国と八

旗制の全体像を説くことによって、八旗制下の旗王・旗人の紐帯や多様な来源・存在形態を俎上に載せ、これをユーラシア諸帝国における君主と軍事集団のあり方の一つとして位置づけた

(6) 以上のような個別研究の成果を得ると同時に、本研究の中心テーマを、ヨーロッパの事例、日本の事例などにも広げ、それぞれ、中央アジアの突厥帝国の遊牧的軍事システム、ヨーロッパ・スペインの軍事政権、中世中華帝国の軍事的再評価、中世インド大陸における非ムスリム武人政権の構成と展開、日本の佐賀藩における殉死の事例などに関して、研究分担者の担当する諸帝国との比較史的検討を行った。これらにより、上述の諸帝国におけるパターンと比較的親和性の高い事例を、諸地域において確認するとともに、それらにおいては、政治権力における周縁者の中枢への取り込み形態と忠誠心の発生の間に密接な関係があることが示唆された。

(7) グルジア・アルメニアにおける現地調査では、これらの両国が初期イスラーム帝国からサファヴィー朝、オスマン帝国にいたるまでつねに境域として、越境する武人のあられる故地であるとともに、その地域自体もヨーロッパとアジアの分水嶺であるコーカサス山脈を中心に、多様な地形と多様な文化、生態環境の交錯する土地であることを実地に確認し、そのような多様かつ複雑な地政学的条件が、周辺諸帝国に対して与えた、意義を、主に軍事的側面および帝国に対する人材供給の側面から考察した。また3年間にわたってグルジア・アルメニア研究者とのネットワークを築き、国際ワークショップなどを開催することにより、文明の岐路でありユーラシアの中央に位置するコーカサス地方の複雑な国家形成・宗教・軍事状況を、ユーラシア諸帝国の帝国支配構造および軍事集団形成と比較し、また具体的に各地域史との連動のあり方を検討することにより、本プロジェクトの成果をもたらした。

(8) これらの成果は、国内外の学術雑誌その他に論文として発表したほか、ポツダム(ドイツ)、イェール大学(アメリカ)や国内で開催された国際シンポジウムでも報告され、また著作としても刊行された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計15件)

真下裕之、「インド史」の成り立ちについて：「イスラーム」と南アジアの「在来社会」、今松泰・澤井一彰編『前近代南アジアにおけるイスラームの諸相』、査読無、

2015, pp.1-22

前田弘毅「フロンティアから、そして、またフロンティアへ」、歴史学研究、査読無、924号、2014、pp.165-173

清水和裕、アッパース朝バグダードにおける教友呪詛、西南アジア研究、査読有、77号、2012、pp. 19-38

真下裕之、ムガル帝国におけるバフシ職について：大バフシ職任用における人的要因、東洋史研究、71巻3号、2012、pp. 85-130

前田弘毅、ツァーリとシャーに仕えたアルメニア人：「言葉の箱」と呼ばれた一族の活動から、ユーラシア世界 <東>と<西>、査読有、1巻、2012、pp. 127-152

Hirotake MAEDA、Exploitation of the Frontier: The Caucasus Policy of Shah `Abbas I, Iran and the World in the Safavid Age、査読有、vol. 1、2012、pp. 471-489

[学会発表](計23件)

清水和裕、イスラーム帝国アッパース朝における君主と軍事集団、九州史学会大会、2014/12/14、九州大学(福岡県福岡市)

前田弘毅、サファヴィー朝統治体制における君主と軍事集団、九州史学会大会、2014/12/14、九州大学(福岡県福岡市)

真下裕之、ムガル帝国における君主と軍事集団：マンサブ制度化における君主と軍事集団、九州史学会大会、2014/12/14、九州大学(福岡県福岡市)

杉山清彦、マンジュ=大清帝国における君主と軍事集団、九州史学会大会、2014/12/14、九州大学(福岡県福岡市)

前田弘毅、フロンティアから、そしてまたフロンティアへ、歴史学研究会大会、2014/5/25、駒澤大学(東京都世田谷区)

Hirotake MAEDA、Fresh Recruits from the Caucasus serving the Persianate Empires、The Persianate World: A Conceptual Inquiry、2014/5/9-11、New Haven (U.S.A.)

真下裕之、「インド史」の成り立ちについて：「ヒンドゥー時代」と「ムハンマド教徒時代」、シンポジウム「前近代南アジアにおけるイスラームの諸相：在来社会の

接触・交流・変容」、2014/10/5、京都大学（京都府京都市）

真下裕之、近世南アジアにおける人的移動の記録と記憶：アーディル・シャーヒー朝、クトゥブ・シャーヒー朝の場合、シンポジウム「人の移動・移住とその記録：陸と海の近世アジア」、2014/9/21、北海道大学（北海道札幌市）

真下裕之、インドにおけるイスラーム関連資料の現状について、国際シンポジウム「地域の歴史資料をとりまく世界の諸相：史料保存を中心に考える」、2013/12/1、神戸大学（兵庫県神戸市）

Hirotake MAEDA、New Information on Giorgi Saakadze's Revolt from Fazli Khuzani's Persian Chronicle、2nd International Symposium of Georgian Manuscripts、2013/6/28、Tbilisi (Georgia)

Kiyohiko SUGIYAMA、A Chinese Dynasty or a Manchu Khanate?: The Qing Empire and its Military Forces、Internationale Tagung Lbenswelt Gewaltoekonomie-Herrschaftsinstrument、2013/3/14、Potsdam (Germany)

Hirotake MAEDA、Western and Southern Georgia from Persian Perspective: From a Bibliographical Reference on Manuchar III Jaqeli、2nd International Conference Tao-Klarjeti、2012/9/8、Batumi (Georgia)

〔図書〕(計7件)

清水和裕、イスラーム史のなかの奴隷、山川出版社、2015、96p.

杉山清彦、大清帝国の形成と八旗制、名古屋大学出版会、2015、574p.

清水和裕、真下裕之他、イスラーム書物の歴史、名古屋大学出版会、2014、pp. 31-45, 84-98, 279-297

清水和裕他、越境者の世界史：奴隷・移住者・混血者、春風社、2014、pp. 12-14, 19-21, 39-56

清水和裕(監訳)、ディヴィッド・ニコル、イスラーム世界歴史地図、明石書店、2014、191p.

清水和裕他、生と死の探求、九州大学出版会、2013、pp. 55-70

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 和裕 (SHIMIZU, Kazuhiro)
九州大学・人文科学研究院・教授
研究者番号：70274404

(2) 研究分担者

真下 裕之 (MASHITA, Hiroyuki)
神戸大学・人文学研究科・准教授
研究者番号：70303899

杉山 清彦 (SUGIYAMA, Kiyohiko)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：80379213

前田 弘毅 (MAEDA, Hirotake)
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号：90374701